

ルーマニア，カルパチア山村における地域住民の景観評価と山村の持続的発展 －アルジェシ郡ルカルを事例として－

伊藤 貴 啓 *

I はじめに

本小論はルーマニア，カルパチア山村の持続的発展をアルジェシ郡ルカル (Ručar, Argeş) を事例に住民の景観評価¹⁾ という視点から論じようとするものである。

ルーマニアは1989年のチャウシェスク独裁政権の崩壊 (以下，革命)，さらに2007年のヨーロッパ連合 (以下，EU) への加盟によって変化してきた²⁾。そのなかで，農山村は都市との格差に苦しみながら変貌を強いられ，その持続的発展が課題となっている。農山村の変貌は景観の変化となって表出し，地域住民は風景の変化からこの変貌を実感する。本小論はこの点に注目して，地域住民がいかに関景観の変化を評価し，どのような点を地域の課題として感じているのかを考察するなかで，地域の持続的発展に関わる課題を導き出そうとするものである。

ルーマニアの農山村に関して，本年急逝したイギリスの地理学者David Turnockが精力的に研究を積み重ねてきた。Turnock (2007) はルーマニア経済の史的展開をまとめた一書のなかで，農業について各作物・畜種農業および山間地農業の変化と現状についてまとめ，Turnock (2009) はチャウシェスク独裁政権崩壊後からEU加盟後の変化までを取り扱い，本小論と関わる農業に関しては農地の民有化 (restitution)，農業施策，インフ

ラストラクチャー (機械，灌漑，化学化，流通，金融など) の現状を明らかにしている。Turnockの研究は多岐にわたるが，ルーマニア各地の農村の現状を分析して，農業，農産加工，ルーラルツーリズム，伝統工芸などの多就業または多角化を農村の発展の主な道筋としている (Muicaら，2000；Turnock，1999・2006)。とりわけ，ルーラルツーリズムではアグロツーリズムのほか，国立公園でのエコツーリズムや文化・世界遺産に関わるツーリズムが取り上げられ，環境保全との関わりで土地利用が論じられてきた (Turnock，2002)。

これに対して，日本では漆原らが社会体制の転換に伴う移牧の変化 (Shirasaka，2007；漆原，2009)，移牧による土地荒廃 (Urushibara-Yoshino・Mori，2007) と羊の飼養頭数減少に伴う植生変化 (漆原・高瀬，2010) について明らかにしている。このほか，カルパチア山村のゴスポダリエ (杉本，2009)，条件不利地域の農村の社会構造とルーラルツーリズムの振興 (大野・中道・小内，2005) などの研究が行われてきた。

これらから，ルーマニアの農山村が伝統的な生業の衰退のなかで，多就業と多角化を進めていること，さらに各地でルーラルツーリズムを柱に地域振興が模索されていることが明らかにされてきた。本研究ではこの点を踏まえ，ルーラルツーリズムが近年，盛んになりつつあるアルジェシ郡ルカルを研究対象地域として設定した。

*愛知教育大学地域社会システム講座

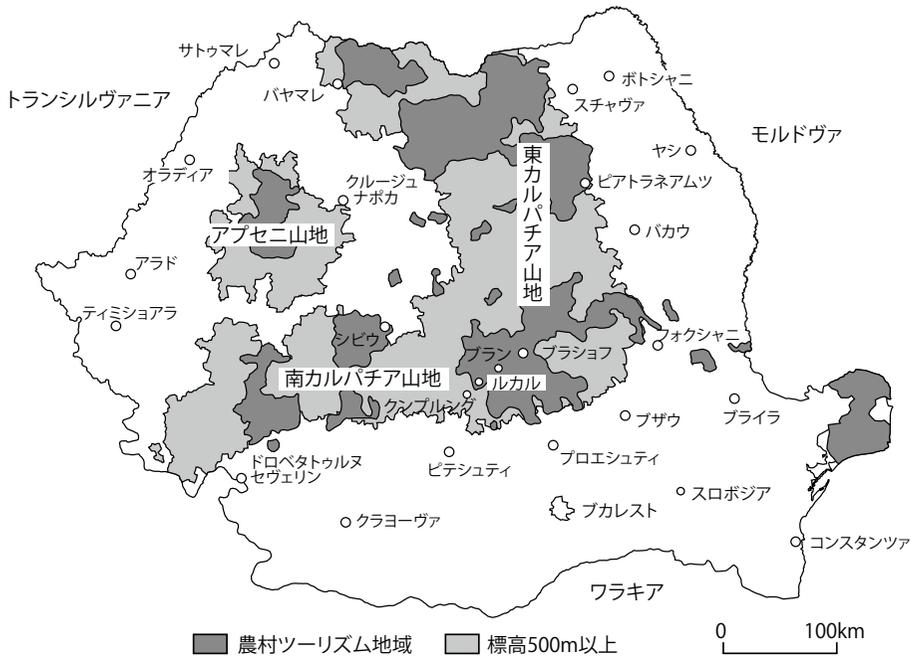


図1 ルーマニアにおける農村ツーリズム地域の展開
 (Academia Română Institutul de Geografie, 2007ほかにより作成)

ルカルは東カルパチア山地が南カルパチア山地へ遷移してワラキアからトランシルヴァニアに抜ける回廊地帯(ルカルーブラン回廊)に位置し、首都ブカレストからは自動車です3時間ほどの距離にある(図1)。また、その東部にはPiatra Craiului山を中心とした国立公園(1990年設立)が含まれ、アルジェシ郡とブラショフ(Braşov)郡はそれを境とする。回廊内のブラショフに近い、ブラン(Bran)はドラキュラで有名な観光地であり、ルカルでも近年、ペンションなどの宿泊施設が展開してルーラルツーリズムが盛んになりつつある³⁾。

ルカルの人口は2007年現在、6,915人であり、1985年の7,100人と比べれば200人ほどの減少であり、1989年の革命以降、漸減しながらもよく保持されてきたといえる⁴⁾。また、世帯数は1985年の1,988世帯から2002年に2,546世帯へ、さらに2009年に2,870世帯にまで増加している(図2)。この

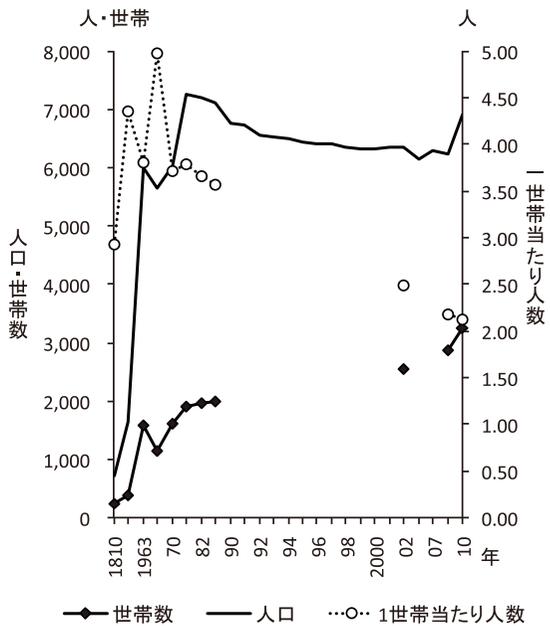


図2 ルカルにおける人口・世帯数の変化
 (役場資料による)

結果、一世帯当たりの人数は1985年の3.57人から2009年に2.17人にまで低下した。役場ではこのような世帯増加を「子世帯の独立」と捉えている。後述するように、革命によって生業構造が大きく変化するなかで、人口が保持されている点にもルカルの持続的発展の可能性を感じることができ

る。さて、以下では生業構造の変化に伴う土地利用と景観の変容を捉えた後、地域住民がそのような景観の変化をいかに評価しているかを究明する。最後に、それら評価から地域の持続的発展の課題を考察していきたい。

II 生業と取り利用の変化

生業の変化 ルカルにおける地域住民の生業は世帯単位でみれば、農外就業と農業を組み合わせた多就業を特徴としてきた。すなわち、コミュニスト時代、農外就業ではルカルから南へ17kmほどにあるクンプルングのコンビナートの工場またはルカル村内のアロの工場などへの通勤のほか、国営のダム建設または国有化された林地での林業作業への従事が一般的であった。ルカルでは農地の集団化が行われず、林地のみが国有化された。これは中心部の平坦地を除けば、農地が斜面に位置し、農地の集団化に適さないためであった。農業は移牧による羊飼養やジャガイモ、飼料用作物の栽培などを組み合わせたものであった。例えば、革命直後の1990年に羊の飼養頭数は5,524頭で14.3 tの羊毛が生産されていた。このほか、牛1,341頭、家禽8,971羽が飼育され、他にジャガイモ560 t、野菜82 tが生産された。

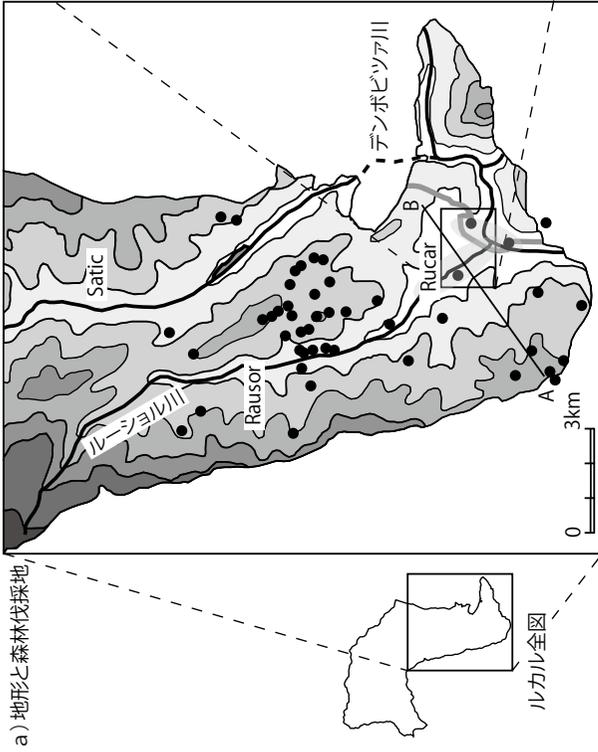
1989年の革命によって、ルカルの生業は市場経済への移行と林地の民有化⁵⁾によって変化した。農外就業ではクンプルングのコンビナート、さらにアロの工場も閉鎖され、林業従事者も林地の3次(1991, 2000, 2005年)にわたる民有化によ

てほぼみられなくなった。この結果、給与所得者は革命後の1991年になお1,782人みられたが、2000年には630人へ減少した。しかし、2006年には683人と僅かながら増加している。これは林地の民有化に伴って林業とその関連ビジネスのほか、食品、商業、サービス業などに関わる起業のほか、先述したような宿泊施設の展開によるルーラルツーリズムもみられるようになったためである⁶⁾。

他方で、羊の飼養頭数は1999年に1,150頭にまで減少し、羊毛生産量も7.79 tと1990年の54.5%にまで減少した。しかし、牛の飼養頭数は2003年に1,302頭とほぼ変わりなく、家禽は1.4万羽に増えていた。また、ジャガイモと野菜の生産量も各年で増減しながらも2003年に675 t、77 tの水準にあった。羊飼養は革命以降の羊毛価格の低下のほか、農地の民有化による移牧時の農地所有者との軋轢などによって縮小を余儀なくされた⁷⁾。EU加盟に伴ってEU衛生基準への適合を求められ、この地方における伝統的な製法によるチーズの輸出ができなくなったことも家畜飼養に影響した。このような生業の変化は同時に土地利用と景観の変容となって表出した。

土地利用の変化 ルカルの土地利用は地形に規定されている(図3)。すなわち、村の中心部はデンボビツァ川とルーシヨル川によって開析された、谷底の平坦地に位置して宅地が集積する。緩斜面は草地として利用され、緩斜面上部には林地が広がる。このほか、ルーシヨル川とデンボビツァ川の上流の谷底に、ルーシヨルとサツィクの各集落が散村形態で立地して、ともに谷底の平坦地が宅地・草地として利用されている。このような基本的パターンは革命以降の生業の変化とともに変容してきた。

その変容は起業に伴う、村中心部およびルーシヨル、サツィクにおける変化と緩斜面とその



a) 地形と森林伐採地



ルカル中心部 主要道 河川 ●森林伐採地 (2006-2009年)

b) 景観構成要素の分布
 ● 宿泊施設 ○ 食品雑貨店 ⊕ 飲食店 ○ その他の商業, サービス業など
 □ 食肉, パン □ 製材業 ◎ 村役場 教会 ⊕ 墓地
 S 学校 森 建築中 田 銀行 P 郵便局

c) 地形縦断面と土地利用
 林地 植林地 採草地 牧野 教会
 都市的土地利用 (宅地ほか) A—B 地形縦断面の範囲

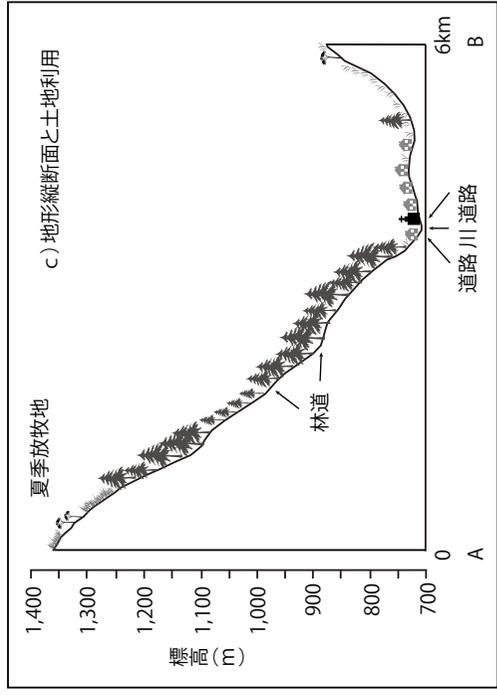
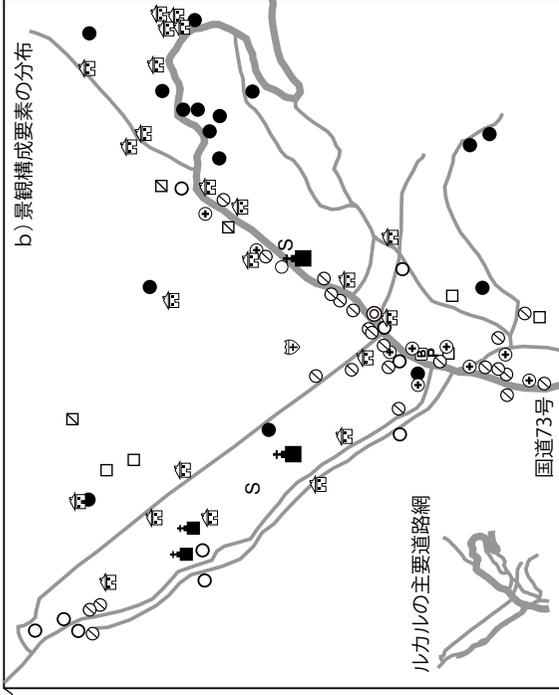


図3 ルカルの地形と景観・土地利用の構成 (2006年の役場空中写真, 地形図, 2009・2010年現地調査などにより作成)

上部における変化とに大別される。とくにルーシヨルとサツェイクではルーラルツーリズムへの特化がみられた。これに対して、村中心部ではツーリズム以外の起業もみられる。そこで、両者がみられて地域住民が集住する村中心部とその周囲の緩斜面およびその上部について取り上げ、土地利用の変化をみていくこととする。

ルカル中心部は標高700m内外の谷底に位置して山地が周囲を取り囲む。集落は国道73号線とルーシヨルに向かう道路沿いに路村状の集村形態を示す。そのなかで、起業に伴ってペンションなどの宿泊施設のほか、食料雑貨店を中心に対個人サービス業が主要道に面してみられ、製材所や食肉処理場などの製造業が主要道から外れた村の周囲でみられた(図3)。宅地には菜園が多くの場合附随して、ジャガイモや野菜などの栽培が行われていた。

周囲の山の斜面は標高1,000m付近まで草地として利用される。標高1,200m以上の平坦地にひろがる放牧地では、夏季にチヨバン(cibān)と呼ばれる牧夫による放牧が行われ、ステネと呼ばれる作業小屋でチーズの製造が行われている。それ以下の斜面の草地は住民にとって冬季、羊や牛を舎飼するための飼料基盤となっている。しかし、緩斜面の草地では家畜飼養頭数の減少に伴って、所々で灌木がみられるようになった。人間の手によって維持されてきた景観の変化は羊飼養の放棄によって再生が一部で難しくなりつつあり、さらに林業関連ビジネスの起業によって大きな変貌を強いられてきた。

標高1,000m以上では林地が卓越するものの、標高1,200mまでの林地では2006年から2009年のわずか3年間で37か所の伐採地を確認できた(図3-a)。とりわけ、その数は1,000m~1,200mまでの林地が24か所と最も多く、さらに標高1,200m以上でも10か所みられた。これらは草地に隣接し

て、伐りだしが容易な林地であり、植林がほとんどなされていない。3次にわたる林地の民有化に伴って、ルカルでは林業関連ビジネスの起業がみられた。すなわち、製材業と木材伐採搬出業では1991年の第1次民有化以降にそれぞれ3業者と2業者、2000年の第2次民有化以降に4業者と7業者、2005年の第3次民有化以降に3業者と11業者が創業している。第2次民有化の上限面積は10ha(後に100haに上方修正)、第3次では1948年の所有地の完全返還がなされた。このため、返還された林地や購入した林地で収奪的林業を行う起業がみられたのである⁸⁾。この結果、地域住民は景観の変化を先に述べたような伐採によって、身近な風景を眺めながら実感していった。

Ⅲ 景観の変化とその評価

景観の変化 ルカルの景観はその立地環境と所有・管理の主体などから表1のような要素で構成される⁹⁾。ここではルカルの景観をまずその基調となる「地の風景」からみていこう。

ルカルでは前述のようにかつて羊の移牧を基幹とした地域の経済システムが自然環境を基盤に成立していた。これは羊飼養の縮小に伴って、変化しながらも未だ「地の風景」を構成する主要要素となっている。例えば、A家は代々にわたって羊飼養を生業としてきた家系であり、現経営主の父親はコミュニスト時代に600頭の羊を飼養した。現経営主は製材業も営むなど多角化を進めるが、なお1,200頭の羊を飼養する。現在の移牧は以下のような経路で行われる。冬季はブカレストの東郊約100kmに位置するスロボジアで舎飼を行い、干し草と小麦・トモロコシの混合物を給与する。5月初めまでにスロボジアから2~3週間かけてルカルに戻り、山の放牧地で過ごして9月半ばにまたスロボジアに降りていく¹⁰⁾。

羊飼養は標高1,200m以上を夏季放牧地として

表1 ルカルにおける景観構成要素とその管理所有形態

景観の構成	地形	山地・山麓						遷移		谷底																							
		頂上付近の平坦地		斜面	山麓		遷移		A		M.O	M	M	O	O	A	A	C	C	A	A	A	C.M	C	C	C							
所有・管理主体	要素	放牧地	林地	林地	採草地	林地	採草地	採草地	果樹園	灌木	住居			採草地	サービ	ペン	製材	食肉	建物	新築	市場	墓	教会	道路	電線	電信柱	ガス	行政	学校	医療			
所有	個人	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	行政(公的機関)	●	●																														
	民間														●	●	●	●							●							●	
管理	個人	●	●			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●									●	
	家族集団													□	□																		
	民間	●														●	●	●	●					●								●	
	森林組合(公)		□	□		□																											
	森林組合(民)		□	□		□																											
行政(公的機関)	●																																
EU	△														△			△														△	

●管理・活動、所有の主体 □管理・活動、所有の補助的役割 △補助金制度などによる関わり 構成要素の名称に下線があるものは革命後またはEU加盟後にみられるようになったものである
A:全域 M:幹線道路沿い C:中心部 O:中心部周辺 (2008年~2010年現地調査により作成)

利用し、標高900m未満の傾斜地あるいは谷底の宅地周囲も含めて採草地として利用することによって成り立っている。ルカルには夏季の野営地が5つある。それらは個人、村あるいは持ち株共有で所有されてチョパンに貸される。2009年7月に聞き取りをした、一つの野営地(47ha)は個人の所有地であり、それをチョパンが借り受けて40人ほどの村人から委託された牛60頭を5月12日から9月15日までの期間、放牧していた。チョパンは朝夕2回搾乳を行い、その原乳をチーズに加工する。60頭からの搾乳量は時期的な草の多寡によって異なり、草の量の多い放牧当初は1日250~300リットル搾れるものの、草が少なくなってくると150~200リットルになってしまうという。チーズに必要な原乳量はチーズの種類によって異なるが、ここでは生乳12リットルから1kgできるものを作っている。委託した村人は放牧期間に一度(2009年の場合、6月15日)、搾乳量を実際に放牧地で確認して、この割合で委託期間全体のチーズ受取量を決め、残りがチョパンの取り分となる。

放牧地と谷底の村中心部に至る斜面に、林地がひろがる(図3-c)。林地は谷底の地域住民が日常的に眺める風景であり、林地と羊飼養に関わる風景が谷底に集村形態で住む、地域住民からみた「地の風景」を構成する伝統的要素である。しかし、このような「地の風景」は前述の起業によって、ルーラルツーリズムの担い手としての宿泊施設、

林業関連ビジネスの開業に伴う森林伐採のほか、それとも関連した新規建築も加わって変化しつつある(図3-b)。

新規建築は宿泊施設の開業を目指した新築や増改築、海外からの送金資金を用いた新築のほか、起業による利潤を活かした新築などによるものである。海外からの送金は若者層の就業の場が少なく、イタリア・スペインなどへ働きに出かけた者からのものであり、ルカルにおいて家族集団の結びつきの強さを示すものともいえる。他方で、新規建築について、一部住民からは違法伐採など、脱法行為による家屋の新築を指摘する声も聞かれた。それらは脱法の風景ともいべきものである。また、宿泊施設の開設は当初、EUのSAPARDやIMFの補助金を利用した増改築で行われ、食肉工場もEUの補助金が利用されていた。ルカルの景観はこれらの情報に接して利用することが可能な社会階層、言い換えれば革命とEUの加盟のなかで従前の生業を自ら変革しえた人々によって変わってきたと言えよう¹⁾。

他方で、景観は地域住民の「記憶のアーカイブス」としての役割も果たす。ルカルの地域住民は前述した景観変化を「記憶の風景」との乖離からプラス、またはマイナスのいずれかに評価する。また、そのような景観評価は時間的ずれを伴いながら特定の景観変化を強めたり、反対に修景したりしていく。次に地域住民の景観評価をルーラル

ツーリズムという景観変化の主体（ペンション経営者）とそれ以外の地域住民、そして行政側の村長・副村長という立場からみていきたい（表2）¹²⁾。

景観評価 地域住民の景観評価では各個人の立場を超えて、ルカルの風景と自然がともに高く評価されていた。風景ではルカルの盆地上の地形と森林が、自然ではリスクの低い点が高評価の理由であった。しかし、森林自体は無回答者を除く18

人のうち村長・副村長以外の全員がマイナスの評価を下していた。それは過伐採による森林資源の枯渇と伐採跡地への植林がなされていないことを懸念したものである。このような森林への懸念に対して、農業は一部で採草が荒れてきたと実感している者がみられるが、羊毛価格の低迷下のなかでよく保全されていると考える者もいて森林に比べてプラスの評価がみられた。

地域社会に関して、地縁・血縁の絆は風景・自

表2 ルカルにおける住民の生活景評価

	回答者 年齢	生業	風景	コミュニ ティの絆	地縁、血 縁の絆	自治体サービス	安全・ 安心	自然	インフラ・ラク チャー	交通イ ンフラ	地域労 働市場	農業	森林
行政側*	1 ND	村長	4	2	5	2	4	4	2	2	3	3	3
	2 ND	副村長	5	3	4	2	3	4	2	2	2	3	3
ペンション 経営	1 43	公務員+α	+						-			-	-*
	2 ND	会社経営+農業	+	4	5	3	5		1		3	±	-
	3 36	観光	5	-	4	2	-	+	-			+	-*
	4 51	年金+ビジネス	5	4	4	4		+				+	-*
	5 41	郵便局員+観光	5	4	5	4	5	5	2		1	-	-*
	6 70	年金+観光	5	3	2	~1	3	4~5	1		-	-	-*
	7 46	会社経営	5	4		5						-	-
小計	40.7		5.0	3.8	4.0	3.8	4.3	4.8	1.3		2.0		
A 通りの 地域 住民	1 34	大工+介護給付	5	1	2	3	+	+	2				
	2 ND	ND	5			2(教育)			3			-	-*
	3 48	失業給付	5	-	+	水道5,ごみ収集 +,教育-,ヘル スケア+				-			
	4 31	給与+農業	5	4	5	5(下水-)	4	5	3	3	1	5	3(-)
	5 40	給与				+(教育, ヘルスケア+)				-			
	6 49	年金+失業給付	5	-	3	2	-	4~5	1	3	-	-	-*
	7 61	年金+農業	4	4	3	3(ヘルスケア-)	4	5	3			4	
	8 50	1				-(教育, ヘルスケア-)			水道路-	+			
	9 33	大工+農業	5	3	3~4	2~3	4~5	5	3~4	3	2	2~3	-
	10 33	給与				ヘルスケア-, 下水道1				2			
	11 44	給与+農業	5	5	5	3(ヘルスケア-)	-(将来 的不安)	4	0(上下水道, 道路-)	5	1	2	-
	12 52	給与	5	+	+				-(上下水道0)	1		-	-
	13 70	年金+給与				-(教育, ヘルスケア-)			-(上下水道-)	±			
	14 62,57	年金+農業	5	3	3	+(教育, ヘルスケア+)		+	-(上下水道欠)		0	±	-*
	15 30	大工+農業	5	3	5	3		+	0	4	0	+	-*
	16 60	年金+農業				-			-	-		+	
	17 46	給与+農業	5	5	4	-(教育,ヘルス ケア+,文化-)	3	+	0(上下水道, 道路-)	5		+	-*
	18 31	給与	5	+	+	教育+			-(上下水道-)	-			
	19 38	給与	5			教育-			-(上下水道-)				±
	20 33	給与				教育+			上下水道-	-			
	21 57	年金	5			+(教育, ヘルスケア+)			-(上下水道-)				-
	22 78,76	年金	5										
小計	48.4		4.9	3.5	3.7	3.2	3.9	4.7	1.7	3.3	0.8	3.4	3.0
計	48.2		4.8	3.5	3.9	3.2	3.9	4.6	1.7	3.0	1.4	3.3	3.0
			+2	+1,-2	+3	教育(+5,-5)ヘル スケア(+5,-5)水道5, ごみ収集+1,文化-1	-3	+6	上下水道-10,下水 道-9,道路-4	+1,-6, ±1	-2	+5,-7, ±2	-16,±1

注)行政側の*は村長・副村長の個人的見解であり、村の公式見解ではない。森林欄の*は過剰伐採による森林資源の枯渇およびその後の植林がなされていないことに危機感を表明した者を示す。回答者年齢の下線は女性を示す。NDはノンデータ、空欄は回答なし。計・小計の平均値は数値で回答した者を集計、母数としたものであり、計の下段は各項目についてプラス、マイナス評価した者の数を合計したものである。
(2010年7月現地調査により作成)

然に次ぐ高い評点を示し、結果としてルカルでの生活の安心・安全をもたらしている。コミュニティの絆はこれよりやや低いものの、プラスの評価であった。これに対して、地域経済に関わる地域労働市場の評価は村長の3.0を除いて概して低かった。革命前、ルカルでは前述のように農地の集団化が行われず、羊毛価格も国によって定められ、他方で農外就業は通勤兼業や国営ダム・林業従事などによって現在よりも安定した形態を示した。しかし、革命によって安定的な農外就業は失われ、そのなかで前述のようにルーラルツーリズムや起業する者が現れた。

ルーラルツーリズムの担い手としてのペンション経営者の評価は他の住民と同様の傾向を示したが、自治体サービスでやや高い評価を与える者がみられた。ペンション経営者が自治体サービスの恩恵に浴する機会が多いためと考えられる。また、自治体サービスではA通りの住民が教育とヘルスケアの両者をそれぞれプラスとマイナスで評価する者が同程度みられた。ルカルは革命前から林地としての性格ゆえに林業高等学校が教育の中心的役割を果たし、伝統的に教育熱心な地域であった。革命後、教育水準が低下したとマイナス評価する者がいるものの、現在もプラスに評価する者は多い。この学校は革命後、社会の変化とともにITや伝統文化の伝承など、新たな試みも行っている。2009年7月の聞き取りによれば、大学への進学率は7割におよび、大学卒業後に地元に戻ってくる若者も多いという。このことは後述するルーラルツーリズムの展開にも影響していた。

行政側の村長と副村長の個人的見解もほぼ同様の傾向を示す。風景、自然および地縁・血縁の絆の評価が高く、自治体サービス、インフラストラクチャーの評価が低い。森林と農業はともに懸念事項を抱えながら中庸に評価されていた。村長は森林に関して地域住民と同様に伐採後、植林がな

されていないことを懸念しており、さらに就業者の4割を占める製材会社が2010年7月の聞き取り時点で生産量を2007年の半分に減らしていることを憂慮していた。また、林業ではなく、ルーラルツーリズムを村の産業として振興したいという考えをもっていた。農業も羊毛価格の低迷、さらには担い手の高齢化や若者が継いでいないために採草地の荒れや放牧地の放棄がみられると認識する。ただ、全体的には大規模飼養層によって維持されていると考えていた。それよりも再生産価格を下回る販売価格が心配で、この点からも農とツーリズムの複合による発展を目指したいという。

ルカルにおいて、ツーリズムが地域の発展の鍵であるというのはペンション経営者、A通り地域住民を問わず、皆が認識していたことであった。近年におけるルーラルツーリズムの展開と地域住民の景観評価からルカルの持続的発展の課題について最後にまとめてみよう。

IV 農山村の持続的発展とルーラルツーリズム —むすびにかえて

ルカルにおけるルーラルツーリズムの展開ではブカレスト大都市圏から3時間という距離のほか、羊の移牧や、回廊地帯への立地に伴う他地域との交流がオープンマインドな人々の性格と、民泊の伝統をもたらしたことを地域的基盤としていた(図4)。ブカレスト大都市圏の住民にとって、ルカルはその「地の風景」の美しさとともに、ブカレスト大都市圏では断絶したイースターやクリスマスなどのハレの日における伝統を食も含めて楽しむことが可能な場所であった。ルーラルツーリズムは2000年前後からかつての民泊を経験した高齢者層や30歳代から40歳代層によって始められた。当初の展開には1994年設立のルーラルツーリズムの振興を目指す全国組織ANTREC¹³⁾からの情報やツーリストの紹介が役だった。

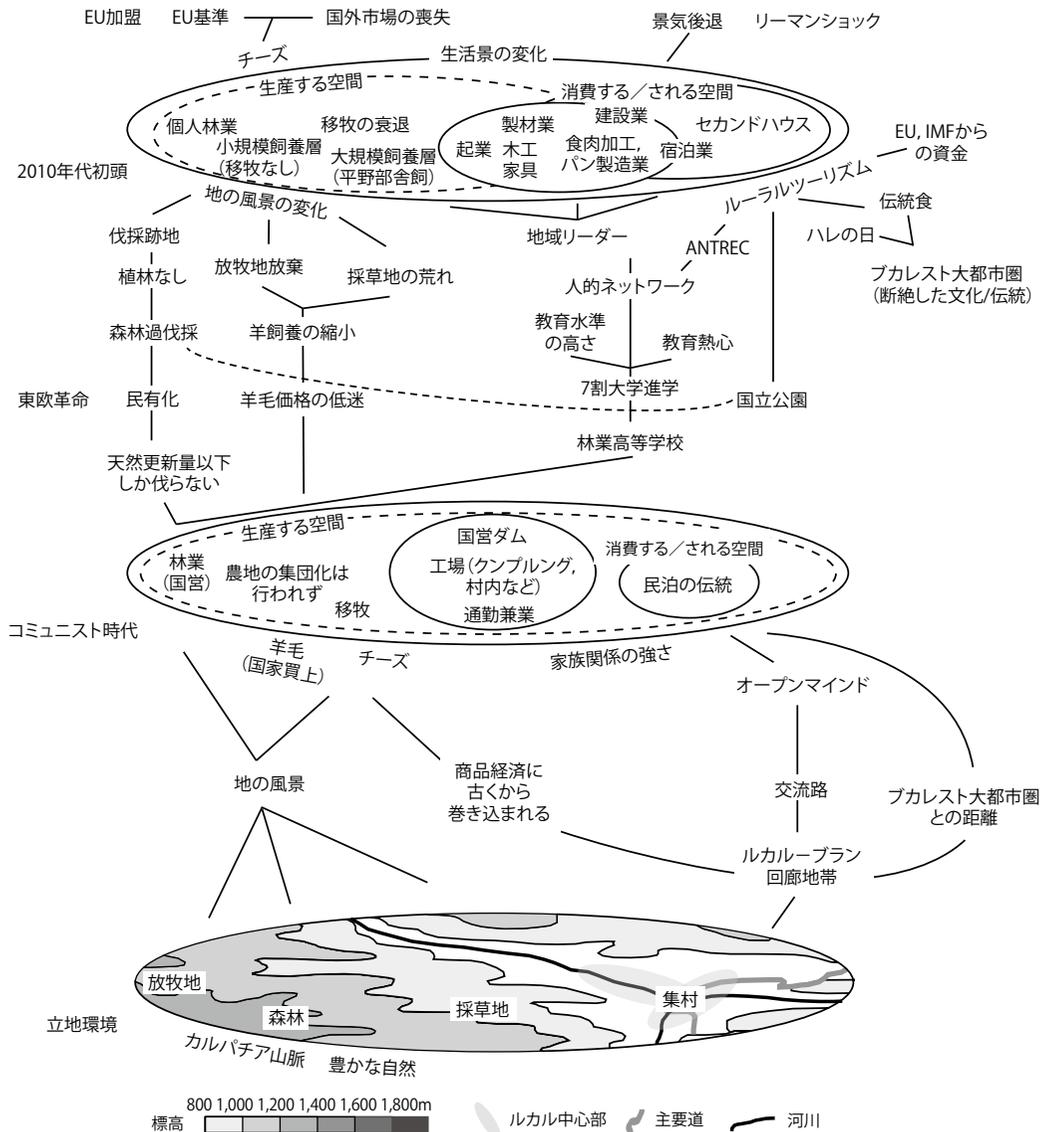


図4 ルカルにおける地域構造の変化
(2008年～2010年現地調査による)

農村の持続的発展を考える上で、ルールルツーリズムが注目される理由はその経済的効果にある。ルカルの場合、その効果は限定的であるものの、民宿を行う世帯のみならず、多くの場合、食肉工場やパン工房への食材注文、さらに血縁・地縁からの食材購入のような、食を通じて他世帯に波及していた。地域住民が地縁・血縁の絆をブラ

ス評価したように、ルカルのツーリズムもこの絆を基盤としたものであるといえよう。村長はこのようなツーリズムと農の複合を地域発展の鍵と位置づける。しかし、ペンション経営者のなかにはクンプルング・ブラショフなどで食材を購入すると回答した者が少なくなかった。それは地元で大量の質の揃った食材を購入できないこと、また品

質基準などの面で不安があることを理由としていた。この点をいかに改善できるかがツーリズムと農の複合を通じた地域の持続的発展の課題の一つである。そのためには農に携わる者を組織化して、その下で一定品質の農畜産物生産を行うために技術の向上をはかって、選別された生産物を共同出荷する仕組みを作る必要があろう。

ルカルでは傾斜地を採草地や放牧地として利用し、人間の手を入れながら美しい「地の風景」を維持してきた。他方で、これは生態系が移牧を中心とした伝統的生業によって保全されてきたことを意味する。しかし、革命後の羊毛価格の低迷やEU加盟に伴うチーズの輸出市場の喪失はこうした農と生態系の維持を脅かしつつある¹⁴⁾。それは観光資源としての「地の風景」と生物多様性の崩壊をもたらす危機でもある。ツーリズムと農の複合は地域農業と生態系の維持という点でも一定の役割を果たす可能性を秘めている。ただ、そのためには「地の風景」のもう一つの主要な構成要素、林業も過伐採の制限と、植林によって収奪的林業から転換をしながら資源と風景を維持するようにならなければならないといえよう。

2008年のリーマンショック以降、ルカルでは宿泊者の減少と素泊まりの増加がみられた。ツーリズムと農の複合による地域の持続的発展からいえば、ルカルのルラルツーリズムがルカルブランドのフード・ツーリズムとして確立できるか、さらに、美しい「地の風景」や伝統文化へとそれを拡げうるかも課題の一つといえよう。

ルカルは伝統的に他出した後継者層が戻ってくる地域だという。このことが革命以降もなお人口がよく保持されている一つの理由であろう。その意味で、ツーリズムと農の複合は地域労働市場がなお確立されていない現状では、他出した後継者層の就労の場となる可能性がある。それは多くのペンション経営者が後継者層のためにペンション

を開設したと答えていることからわかる。将来の地域の担い手をいかに根付かせえるかが地域の持続的発展の鍵であろう。

ルカルの事例からルーマニアの農村山の持続的発展を展望すると、地域の自然環境と共存してきた伝統的生業と、伝統的文化を維持する形でツーリズムを根づかせようかどうかのポイントであろう。その鍵は食を媒介に、ルラルツーリズムが伝統的生業や文化と共利共生を目指す方途をいかに住民自らの手で自立的に道筋だっていけるかにある。その際、ルカルの「地の風景」のように、ツーリストにルラルティの真の美しさを感じさせようが必要であろう。

本小論を岐阜大学の小林浩二先生のご退職にあたり、謹呈させていただきます。先生には本小論の基となる科研費による共同調査に加えて頂いたほか、分担執筆などさまざまな場面で誘掖頂きました。先生のご健勝を心よりお祈り申し上げます。なお、本小論は平成20～22年度科学研究費基盤研究B（海外学術調査）「ルーマニア・ブルガリア農村における持続的発展の危機とその再生の可能性（代表小林浩二岐阜大学教授 課題番号20401003）」による小林浩二、呉羽正昭、佐々木リディア、中臺由佳里、ドゥミトレスク・ビアンカ諸氏との共同調査結果に基づくものである。本小論の現地調査においてルカル村役場と地元の方々のほか、共同調査者の皆さま、とりわけ佐々木リディア氏に通知ほかでお世話になりました。記して心からお礼申し上げます。

注

- 1) ここでは建築学の分野で議論されてきた生活景の考えを援用する（後藤，2009）。そこでは生活景を①景観の基調となる風景，②規範となる風景，③記憶のアーカイブスとしての風景，④地域アイデンティティに弁別する。生活景は基調となる風景をベースに、地域住民によって形成された社会空間としての地域が風景に表出するものであり、社会経済

の変化とともに規範となる風景も変わって、積層していく。そのなかにはかつての生活景がアーカイブされており、地域住民は記憶のなかの生活景との同定で変化を見極めることができる。そして、これらの生活景は地域性と結びついたものであるという。ただ、日本建築学会編（2009）をみると概念と実際の分析では乖離も見受けられ、熟した概念とはなお言えないように思われる。しかし、本小論では従来の地理的景観の概念を踏まえながらも景観形成の主体である地域住民に寄り添うため、生活景の考えを援用することとした。それは主体による景観への働きかけを「人間と自然の関係」から捉えるだけでなく、主体による景観の評価とその修景という相互作用にも注目して地域の持続的発展を考察したいからである。具体的には①の基調となる風景を地の風景と呼び、それがどのような地域的基盤のなかで形成され、言い換えれば地域性を表出したものであり、どのような社会経済の変化によって変わりつつあるのか。そして、その変化のなかで規範となる風景の変質とともに、地域住民が③の記憶のアーカイブと変化した景観を同定していかなる評価を下しているのかに注目して、分析を進めることとした。

2) 例えば、Turnock (2009), 吉井 (2000) を参照

3) 近年のルーラルツーリズムの展開は呉羽正昭・伊藤貴啓 (2010) を参照。なお、ルカルをはじめ、回廊内の各地の潜在的ポテンシャルはDumitrescu, D., Baltălungă, A., Billard, G., Bailly, G. & Manea, N. (2011) で報告されている。

4) 本小論における定量的な統計的データは村役場資料のほか、ルーマニア統計局資料のデータによる。

5) ルーマニアにおける森林の利用と保全の概略は小林 (2010) を参照。

6) 紙幅の関係からルカルにおける中小企業の叢生および土地利用の詳細は別報に譲ることとした。

7) 羊飼養農家への聞き取りによる。なお、Turnock (2007), p.201でも同様の指摘がある

8) ただ、Piatra Craiului 国立公園内の林地は所有者であっても利用できず、国立公園側と所有者との利害係争をもたらしている。Ioraș, F., Muică, N.,

Turnock, D. (2001) は森林所有者の新たな収入源としてエコツーリズムを提唱する。

9) ここでは藤倉英世・山田圭二郎・羽貝正美 (2010) の手法を参考にした。

10) 2009年7月20日, A氏談。なお、ルカルのこの形態はShirasaka (2007) のいう正移牧に該当する。

11) 宿泊施設の開設ではEUやIMFなどの資金活用が可能な、言いかえればそのような情報に接して、処理可能な教育レベルを有する人々の間でのネットワークが確認できた。

12) 地域住民の景観評価ではペンション経営者層が比較的、富裕層を主とするため、それとの対比を行うことを目的として特定の通りの全戸に聞き取り調査を行った。このA通りはルカルの中心部からやや離れた周辺部に位置し、インフラストラクチャーの評価で上下水道がその不備からマイナス評価とされているように中心部と違ってインフラ整備に欠ける地区である。

13) Asociația Națională de Turism Rural Ecologic și Cultural (National Association of Rural Ecological and Cultural Tourism) の略である

14) 民宿ではチョパンに羊・牛を預けて生産されたチーズを食材として宿泊客に提供する。その意味で、ルーラルツーリズムはルカルの景観と生態系とも結びついた存在といえる。しかし、ルーマニアのEU加盟によって、食品生産ではEUの衛生基準に適合した生産方法が求められ、ステネで手づくりされる、伝統的なチーズ生産は設備の近代化が、廃業のいずれかを迫られている。伝統的家畜飼養とチーズ生産の放棄はそれらに基づいた人の手が入った自然環境の喪失を意味し、「地の風景」と生物の多様性の危機でもある。その意味では伝統的家畜飼養を“High Nature Value farming”として維持する方策が必要であろう。その概念とルーマニアの事例については European Forum on Nature Conservation and Pastoralism のウェブ<http://www.efncp.org/>を参照のこと

文献

- 漆原和子 (2009) : ルーマニアとブルガリアにおける社会システムの転換に伴うヒツジの移牧の変貌. 立教大学観光学部紀要 11, 39~52
- 漆原和子・高瀬伸悟 (2010) : カルパチア山地における社会体制の変化に伴う移牧の変貌と植生の変化. 法政大学文学部紀要 61, 109~123
- 大野晃・中道仁美・小内純子 (2005) : ルーマニアにおける条件不利地域の現状と課題—スチャバ県ヤコベニ村を対象として—. 現代社会学研究18, 49~67
- 呉羽正昭・伊藤貴啓 (2010) : ルーマニアにおける農村ツーリズム. 農業と経済2010年8月臨時増刊号「進化する農村ツーリズム—協働する都市と農村」昭和田堂, 131~137
- 後藤春彦 (2009) : 生活景とは何か. 日本建築学会編 (2009) : 『生活景—身近な景観価値の発見とまちづくり』学芸社, 23~36.
- 小林浩二 (2010) : ルーマニアにおける森林の利用と保全. 岐阜大学教育学部研究報告人文科学 58(2), 19~29
- 白坂 蕃 (2008) : ルーマニア, トランシルヴァニア山地における羊の移牧. 立教大学観光学部紀要10, 7~38
- 杉本 敦 (2009) : 現代ルーマニア農村事情—山村のゴスポダリエの変容を中心に. 東北人類学論壇8, 54~70
- 日本建築学会編 (2009) : 『生活景—身近な景観価値の発見とまちづくり』学芸社, 286p
- 藤倉英世・山田圭二郎・羽貝正美 (2010) : 地域景観と地域社会の相関構造及び景観の内的システムの生成・発現に関する実証的研究. 土木学会論文集 D66-3, 394~413
- 吉井昌彦 (2000) : 『ルーマニアの市場経済移行—失われた90年代?—』勁草書房, 192p
- Academia Română Institutul de Geografie (2007) : România
Atlas istorico-geografie, Editura Academiei Române, 223~224
- Dumitrescu, D., Baltălungă, A., Billard, G., Bailly, G. & Manea, N. (2011) : Tourist Attraction Assessment of the Bran - Rucar Corridor (Romanian Carpathians). *International Journal of Energy and Environment* 1-5, 154~163
- Ioraş, F., Muică, N. & Turnock, D. (2001) : Approaches to sustainable forestry in the Piatra Craiului National Park. *GeoJournal* 54, 579~598
- Iorio, M. & Corsale A. (2010) : Rural tourism and livelihood strategies in Romania. *Journal of Rural Studies* 26, 152~162
- Muica, N., Nancu, D. & Turnock, D. (2000) : Historical and contemporary aspects of pluriactivity in the Curvature Sub-Carpathians of Romania. *GeoJournal* 50, 199~212
- Shirasaka, S. (2007) : The transhumance of sheep in the Southern Carpathians Mts., Romania. *Geographical Review of Japan* 80, 290~311
- Turnock, D. (1999) : Sustainable rural tourism in the Romanian Carpathians. *The Geographical Journal* 165-2, 192~199
- Turnock, D. (2002) : Ecoregion-based conservation in the Carpathians and the land-use implications. *Land Use Policy* 19, 47~63
- Turnock, D. (2006) : Alternative tourisms in Romania: The role of culture and ecology. *Geographica Pannonica* 10, 50~72
- Turnock, D. (2007) : *Aspects of Independent Romania's Economic History with Particular Reference to Transition for EU Accession*. Ashgate, 298p
- Turnock, D. (2009) : *The Transition from Communism to the European Union*. Edward Elgar. 361p
- Urushibara-Yoshino, K. & MORI, K. (2007) : Degradation of geoeological and hydrological conditions due to grazing in south Carpathian Mountains under the influence of changing social structure in Romania. *Geographical Review of Japan* 80, 272~289



遠景では山地頂上付近の森林が伐採されてみられず、中景では家屋が谷底に散在する。近景から中景の緑野は採草地である。

写真1 ルカル東部から西を望む(2009年7月)



中景の山腹斜面には収穫前後の採草地が広がるものの、山腹上部で灌木がみられる。中景には刈り取られた牧草が干されていた。

写真2 ルカル南部から北を望む(2010年7月)



本野営地では4人のチョパンがステネに泊まりながら朝搾乳したミルクからチーズをつくる。

写真3 ステネと夏季野営地(2009年7月)



従業員20人の製材所。製材後、フローリングやパレットに加工して85%をアラブ諸国を中心に輸出するという。

写真4 製材所の風景(2008年7月)



本工場はEUのSAPARD(水道・衛生関係設備)を受けて2009年に稼働した。EUの衛生基準を満たすため、南アフリカへの輸出を行う。

写真5 食肉工場全景(2009年7月)



会員制ホテルとヴィラはそれぞれ2002年と2006年に開業。企業研修に利用され、従業員16人を雇用して50室の規模を誇る。

写真6 ルーラルツーリズムの風景(2010年7月)

地理学報告 113 号正誤表

	誤	正
3頁左13行目	Ⅱ 生業と取り利用の変化	Ⅱ 生業と土地利用の変化
3頁右 6行目	起業のほか,	起業とともに,
19頁右21行目	マグンロ__プ	マグンロープ (ママ)
21頁左23行目	シュルーベリー, ストラフォード	シュールズベリー, ストラトフォード
22頁左35行目	ロ__テンブルグ	ローテンブルグ
22頁右16行目	ガイドウェ__バス	ガイドウェーバス
24頁左14行目	書き出し部分である。	書き出し部分である (ただし, 生徒に示す際, 旧字体と旧仮名遣い, 漢数字を書き改めた)。
” 左17行目	しばしば雨滴が	しばしば, 雨滴が
” 左19行目	あつく, 雲の	厚く, 雲の
” 左22行目	椰子の木をてん綴した	椰子の木を点綴した
” 左35行目	茶褐色に	茶褐色の
” 右 9行目	俄に	俄かに
” 右10行目	反らしていた	反らした
” 右11行目	ウェニス	ヴェニス
” 右13行目	ものではない	ものではあるまい
” 右17行目	1931年当時	1941年当時
28頁左 3行目	感想やなど	感想など